

風を読み、秋を読む
く小さい秋、見つけたいく

二十十日が過ぎれば中秋の名月、そして彼岸です。

虫の音は次第に強くなり、木の実は赤く色付いて、野山が秋色に染まっていきます。

「ちいさい秋、ちいさい秋、ちいさい秋、見つけた！」子どもたちの歌った秋の歌です。詩人であり、画家でもあった竹久夢二は、夕方に黄色い花を咲かせる待宵草をこう詠んでいます。

待てど暮らせど来ぬ人を

よいまらなくさ
宵待草のやるせなさ：

待宵草は夏の季語とされていますが、秋にこそふさわしく、虫の鳴く月夜に咲く姿が似合っているようです。

ピンクや白のコスモスが目に付くころになりました。野原いっぱいの花が風にそよぐのを想像すると、とても気持ちがよくなります。コスモスは和名で秋桜。植物を和名で呼んでみるのも風流です。

街路樹のこずえの先には、いわし雲が広がっています。秋空もすっかり秋の色です。秋



は夜空も似合います。

満月の翌日は「十六夜」。「いざよう」には、「ためらう」、「ぐずぐずする」の意味があります。月の出が前日より少し遅れるため、月が顔を見せるのを躊躇ちゅうちゅうよしていると昔の人は思ったのでしょうか。

「立ち待ちの月」、「居待ちの月」、そして「寝待ちの月」。そんな夜、小さな秋を見つけたいこのごろです。

秋きぬと 目にはさやかに
見えねども 風の音にぞ
驚かれぬる (古今和歌集)

この歌を詠んだ藤原敏行も、きつと「風読みの達人」であり、「秋読みの風流人」だったのでしよう。

指宿市長 豊留 悦男